

平成 24 年度 第 2 回 円卓会議運営委員会 議事録

日時	2012 年 5 月 22 日 (火) 18:15～20:45	
場所	県庁新館連絡通路 4-A 会議室	
出席者 (50 音順、 敬称略)	石河 康久	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
	井手 慎司	滋賀県立大学環境科学部
	伊吹 美賀子	琵琶湖流域ネットワーク委員会
	川端 隆弘	財団法人 淡海環境保全財団
	小林 泉	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
	佐藤 祐一	滋賀県琵琶湖環境科学研究センター
	関 慎介	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
	田仲 輝子	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
	中野 隆弘	びわ湖エコアイデア倶楽部
	野田 晃弘	NPO 法人 蒲生野考現倶楽部
	松沢 松治	びわ湖の水と地域の環境を守る会
	三和 伸彦	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
	村上 悟	NPO 法人 碧いびわ湖
	望月 孝幸	滋賀県琵琶湖環境部琵琶湖政策課
	山口美知子	滋賀県地方自治研究センター
渡辺 維子	公益社団法人 滋賀県環境保全協会	

※今回欠席：北田俊夫（NPO 法人 びわこ豊穡の郷）、堀彰男（滋賀県魚のゆりかご水田プロジェクト推進協議会）

1. MLF 円卓会議の進め方と他の地域フォーラムとの連携について

(1) 地域・分野別フォーラム(特に市町)との連携

前回の運営委員会の議事内容について振り返りを行った後、琵琶湖環境科学研究センターと琵琶湖政策課から地域・分野別フォーラム（特に市町）との連携について以下の通り報告があった。

- ・ 「市町との連携が重要」という話は様々な場面で提起されるが、ほとんどの場合そこから先に話が進まない。今回の計画でこそ、本当の意味での県と市町の連携を進めたい。そのとっかかりとして、円卓会議と市町が主催するフォーラムとで目標や課題を共有することから始めていきたいと考えている（連携の形にも様々なものが考えられ、連携できること・できるところから始めていく）。
- ・ 各市町等で実施されているフォーラムを整理した。全市町一律に依頼を進めるというのではなく、この中で連携しやすそうなところから話を聞きに行き、お互いの課題が何で連携することでどんなメリットがありそうかを相談する。各市町への訪問担当者は決めたので、5～6 月には訪問していきたい。

(2) 市町との連携に関する参加者からのコメント

- ・ 市町も企業もどこかで琵琶湖とつながっている。「琵琶湖のために」を共通目標として計画を推進していくべきである。
- ・ 市町もマザーレイク計画を利用したいと考えているはず。一方で市町からは県の動きが見えづらいというのも事実。県がどのようなことをしようとしているのか、具体的なアクションで示していくことが重要である。
- ・ 湖南流域協議会は明後日に総会がある。そこでは市町も参加しており、県と市町の連携について触れられるとよい。

2. MLF 円卓会議の名称について

MLF 円卓会議の名称については、今回の運営委員会では決定することができなかった。次回以降の継続課題とするが、参加者から以下のような意見が出された。

- ・ キーワードとして「みんな」「つながり」「コネクト」「シェア」といったものが多く挙げられている。
- ・ 「県民」という言葉は、下流府県民を含まない印象が強く、今回の計画にそぐわない。
- ・ 「マザーレイクフォーラム」というのは新しい名称の前に付随するものだが、あくまで看板的な扱いであり、年に1回の会合の内容を具体的に表すものではない。
- ・ 「会議」という言葉からは固い印象を受けるので、避けたい。
- ・ マザーレイクのサポーターが年に1回集まる全体の「集い」であり、いわば「サポーターミーティング」のイメージである。
- ・ 関係者はどうしても「会合の意味」から名称を付けたくなるが、一般参加者にとって行きたいと思える名称であるかどうかも大事な視点である。
- ・ マザーレイクフォーラムは全体、円卓会議は部会というイメージである。
- ・ 次につなげるためにも、「活動を評価しあう」という意味合いが欲しい。

3. 第2回 MLF 円卓会議のテーマと目標について

第2回 MLF 円卓会議のテーマと目標について議論を行い、概ね以下のようにすることで合意された。

- | |
|--|
| <p>① 円卓会議は普及啓発イベントではなく、多様なセクターの人たち（必ずしもテーマに詳しい必要はない）がしっかりと議論しあう場である。</p> <p>② 第2回円卓会議のテーマは、第1回で提示されたTOP5を元に決定する。第1位、3位はどんな議題でもベースとなるテーマであり、第4、5位は個別具体の案であるから、第2位の「（物理的な）つながりの復活」を中心的なテーマとする。</p> |
|--|

※当初「琵琶湖流域の課題の全体像を眺めながら、10年という期間である程度それを網羅する議論ができるように毎年のテーマ（円卓会議のみならず、1年間の継続テーマ）を決定する。そのテーマを受けて地域で議論を深めたものについて、次の年の円卓会議で報告しあう。」と記載していた内容については、下記のような意見があったため、今回の合意事項ではなく、次回の継続協議事項とする。

『この部分は、形としてそうできれば面白いと思いますが、会議の合意とするには時期尚早では。と言うのは、ラムサールの世界湿地デーのテーマは森林や観光など、各地がそれぞれの解釈、関心で扱えるような抽象度の高いものになっています（そうせざるを得ない）。琵琶湖（円卓会議）の場合、それでいいか、もう少し議論がいるだろうと思っています』

(1) 議論の内容

第2回円卓会議のテーマとしては、「①第1回のTOP5から選ぶ」「②第2回は第1回とは異なる新しいテーマを設定する」という2つで大きく意見が分かれた。また、「テーマや参加の形、議論の進め方をどのようにするか」という側面的な内容についても意見が出された。それぞれについて提示された主な意見をまとめると、以下の通りである。

1) 第1回のTOP5から選ぶ

- ・ 円卓会議の継続性を重視するのであれば、第1回のTOP5からテーマを選び、掘り下げる必要がある。またそのために第1回のテーマを「ふなずし」という幅広の内容にしたと理解している。
- ・ 第2位「ヨシ帯・内湖・水田の物理的なつながりの復元」とするのがよい（複数名が賛同）。

- 第1位は内容が広くテーマにしづらい。
- 新参加者にも分かりやすい。
- 「ごみの問題」のような新しいテーマがあってもよいが、第2位のテーマに結びつけていく。
- ・ 第1～5位をうまくまとめたようなテーマがよい。
- ・ 第1位と3位は内容が具体的ではない。一方で第2位は内容のハードルが高い。第5位「オリジナルふなずし」は入りやすいテーマであり、第1位にもつながるのではないか。

2) 第2回は第1回とは異なる新しいテーマを設定する

- ・ 「琵琶湖はきれいになってきたのか？」（複数名が賛同）
 - そもそも「きれい」とは何を意味するのかを議論したい。水質なのかゴミなのか、またいつと比べるのか等により「きれい」の判断は変わる。
 - 「ふなずし」は切り口であり、他の切り口でも見ていく必要がある。
- ・ 「あなたにとっての琵琶湖は？」のように、色んな関心事を話し合う。
- ・ 「琵琶湖の何が悪いのか？」を共通テーマとしつつ、ある年は湖辺、ある年は湖内、のように、ストーリー性、連続性を持たせたテーマ設定とする。（複数名が賛同）
- ・ 「あなたはどんな琵琶湖が好き？」について議論し、その内容を次の円卓会議に活かす。
- ・ 「すくって飲める水をどう取り戻すか？」（沖島で開催された「KODOMO ラムサール＜琵琶湖＞湿地交流」に集った全国の子どもたちが議論して出したメッセージ『母なる琵琶湖 ありがとう 命を生みだす宝の水とりもどそうよ どこでもすくって飲める水』より）

3) テーマや参加の形、議論の進め方をどのようにするか

- ・ 継続性といったとき、必ずしも議論を引き継ぐというのではなく、「琵琶湖はどうなっているのか？」を共通に持ちつつ、毎年テーマを設定していくということも考えられる。
- ・ 人数の配分なども考慮して、メインテーマとサブテーマを設定してはどうか。
- ・ 入門用とプロフェッショナル用のダブルテーマで議論してはどうか。
- ・ 円卓会議は大きな内容について議論し、地域・分野別フォーラムではより個別具体的な内容について議論するという切り分けを行うのがよい。
- ・ ラムサール条約では、毎年2月2日の「世界湿地の日」にテーマを決めて世界的なキャンペーンを実施している。これと同様のイメージで、例えば「びわ湖の日」近くに円卓会議を設けて「今年はこちらをテーマにします」と投げかけて、そのテーマについて市町等で議論する場を設けたりするような枠組みがあってもよいのではないか。またテーマは毎年独立に選ぶというよりは、議論すべきテーマ群のようなものがまずあり、そこから選定していくことで、一定期間で全体について議論できるようなやり方をしている。
- ・ 円卓会議は「これについてどう思うか」といった議論で終わらせず、「私はこれができる」といった具体的なアクションに結びつくような議論にすることが必要である。
- ・ 円卓会議は普及啓発イベントではない。
- ・ 多様なセクターの「つながり」が感じられるテーマとすべきである。研究者と市民が横並びでポスター発表をしてもよい。

(2) その他

その他関連して、以下のような意見も提示された。

- ・ 計画の評価を円卓会議でどのようにするのか。
 - 円卓会議における評価は、市民の感覚を受けて言葉で語られる。それをどう受け止めるかは行政次第である。

- ▶ きっちりした評価提言の仕組みがなければこれまでのイベントと何ら変わらない。その意味で参加者がしっかり議論できる場であることが必要である。
- ・ 開催時期は秋より前がありがたい。市民団体は主に秋に補助金の申請について検討するが、その内容を考える上で参考にできる。
- ・ ラムサール条約の広報教育普及啓発（CEPA：Communication, Education, Participation, and Awareness）の方法や考え方が円卓会議でも参考になる。

4. 次回運営委員会での検討項目について

以上を踏まえると、次回運営委員会での検討項目は以下の通りとなる。

- (1) 毎年の MLF 円卓会議のテーマの決め方に関する再協議
- (2) 第 2 回 MLF 円卓会議のテーマ名決定
- (3) MLF 円卓会議の名称決定
- (4) 開催日程と当日のおよそのプログラム案
- (5) 市町との連携に関する協議の進捗報告

1. 円卓会議の進め方

(1) 地域・分野別フォーラムとの連携 **特に市町**

- 連携しやすい所から話しに行く (各市町)
- 各市町に5-6月中に訪内予定

(2) 各地の状況

(新潟) 「びわ湖の為に」を共通目標に

市町もMLを利用したい / 一方で県の動きは懸念的

(湖南) 明後日に機会

「ここからびわ湖とつながっている (企業も市町も)」

「2位 (物理的)のつながり」 → 「魚の道」

「個別テーマ」

「中心をもつ仕組み(第1,3位)」

「ベースにある」

CEPA
Communication
Education
Participation, Awareness

2. 円卓会議の名称

キーワード: 「みんなの」「つながり」「コネクト」「シェア」...

県民 → 下流府県令まず狭い

「マザーレイクフォーラム」 ← 看板

「○○会議」の形

「会議」 → かたいイメージ、議論弱感じ避けたい

「マザーレイクのサポーターミーティング」のイメージ

→ サポーターが年1回集まる全体の集い

「意味」だけでなく「行きたくなるかどうか」も大切

MLFは全体 ↔ 円卓会議は部会

新任「びわ湖はキレイ」 ↔ 旧「汚れている」

⇒ いつと比べるか(比べないか)で異なる印象

「活動を評価しよう」という意味合いが欲しい

○ 18

X 11 12 13 14 15 19 20~(参加)

(1) (3) (2) (1) (4) (1)

3. 円卓会議の目標・テーマ

継続性を重視すれば、TOP5からテーマを選びさらに掘り下げる

(三和) 「びわ湖はキレイにやっていたのか?」

「びわ湖はどうなっているのか?」という根元的テーマ

それをまた継続性という考え

(野田) TOP5から選ぶ → 2位(物理的)のつながり

(小柳) 毎回テーマ変わると、「イベントの為のテーマ」になる

少なくとも前回のフォローが必要 2位

(三浦) 「ふなずし」はカリロ。深めるとは他のカリロも

(望月) 1~5位をうまくまとめたテーマ ← WS形式なら

(伊吹) 2位 新しいにも分かりやすい

(松沢) 2位 新しいテーマ(例:「ごみ」)があってもいい

(山口) TOP5を受けて「自分たちは何かをしたか」+「今年何とするか」

TOP5から選ぶ (継続性)

「びわ湖はどうなっているのか?」を共通しつつも **新しいテーマ**

(中野) 1と3位 具体的にない

2位は具体的だがハードル高い

「オリジナルふなずし」はやりやすい → 2位

ダブルテーマ(内内とプロ)

(佐) 色んな関心ごとを話そう 「あなたにとってのびわ湖は何?」

(石川) 共通テーマ「びわ湖の何が悪い?」として

あさ年は湖道、あさ年は湖... といった連続性

(田中) 「どんなびわ湖が好き?」 → 次の円卓会議に活かす

(佐田) Story性を持たせる 石川さん案

2位 びわ湖の... 円卓会議 → 大きな内容 / 分野別地域なラム → 個別具体

(村上) 「今年はこのテーマで?」というものがあるといい

それを掘り下げて深めたものを次年の円卓で議論

例: ラムサール条約 (前年の採り直し)と、今年のモニタリング

課題全体。「すくって飲める水をどう取り戻すか?」

10年で全体を担保

「どうすればできる? 私には何かができる?」